

或る論理学者の死

——マールロウ作『パリの大虐殺』

道家弘一郎

### The Death of a Logician in Marlowe's *The Massacre at Paris* —————

Among the *dramatis personae* of this play is a famous logician named Ramus, who has a philosophical discussion with Guise, the leader of the Massacre of St Bartholomew.

The Ramus scene is often criticised as a "quite unnecessary discussion of philosophy while the murder is in progress" (Bakeles) or "a strange academic interlude in a general orgy of slaughter" (Henderson), but, on the contrary, has a strong defence, such as "an integral part of the play which serves to heighten dramatic tension in the middle of the bloody action" (Galloway).

In any case, Guise's censure of Ramus aptly summarises the Catholic and general criticism of Ramus and his disciples on the following two points, that is, first their theory of flat dichotomy and secondly their assertion that the "arguments of testimony are inartificial" .

Their former theory coincides with the new tendency in post-scholastic philosophy which looks for clear and distinct knowledge. The latter assertion intends to provide a place in logic for revealed theology. This effort to establish the logical ground for 'belief' continues from the universal controversy in the medieval age to the Kantian critique in the later age. It is very interesting to see the enemy understand precisely what are the most distinguished points in Ramism.

In the latter part of the scene, Ramus defends himself against Guise. Ramus thinks himself to be a true Aristotelian, and to redress the confusion of the *Organon*. The next line, "...my places, being but three, contains all his" , cannot be understood without knowledge of a controversy between Ramus and Jacob Schegk. The controversy occurs when Ramus draws the three laws of truth, justice, and wisdom from the *Posterior Analytics* of Aristotle. The term, 'place' means 'topos' in 16th century philosophical terms.

Marlowe seems to write the drama for the audience in Cambridge rather than in London, and also to put elements of his autobiography into the characterization of Ramus. Here we can see how broad and how deep the influence of Ramus was on Elizabethan intellectuals.

I

或る論理学者とはベトルス・ラムスのことである。また、マールウがいう「バリの大虐殺」とはラムスが殺された「聖バーソロミュー事件」のことであり、この作品のなかに、ラムスがひとりの登場人物として登場し、虐殺されるのである。

ところで、マールウの時代においてラムスが如何なる人物であつたか、とりわけマールウが卒業したケンブリッジ大学においてラムスの論理学が如何に重んじられていたか、を考え、またマールウが「大学才人」のひとりに数えられ、つねに形而上的な主題を採りあげた劇作家であつたことを考えると、この作品も、その思想的動機から考えられなければならない。

マールウの他の作品が、時間的には遠い過去に、空間的には遙かな異境に取材したものであるのに対して、この作品の場合は、フランスの事件とはいえ、時間的にも空間的にも近い事件である。女王エリザベスにも関わりをもつ僅か二十年たらず前の現代史に属する事件である。描かれるのは次から次へと血腥い惨劇の連続であるが、最も形而上的傾向の強い若き「大学才人」のことである、ここで事件全体の意味を捉えようとしたに違いない。ラムスはほんの少し端役として登場するにすぎないように見えるけれど、関心はむしろラムスから発し、ラムスを巻きこんだこの事件をトータルに捉えようとしたのだ、と思われる。

ラムスとケンブリッジ大学との関係はすでに述べたことがあるので重複をさけ、ここでは若干の補足にとどめる。<sup>(1)</sup>  
 ラムス没後二年、一五七四年（と八一一年）には *Dialectica* の英訳があらわれ、アリストテレスの『オルガノン』にとつて代わるようになり始めた。一五八四年、マローウがまだ在学中のケンブリッジ大学で、ラムスのラテン語原本注釈つきの新版が出版された。すでに一五七七年十一月十一日付けで *Rhetorica Ramii* が *Stationers' Register* に登録されており、サー・ニコラス・ベイコンは一五七四年に *Remi Arithmetica* と *Ramus in artes liberales* をケンブリッジ大学図書館に寄附している。新しい思想はケンブリッジ大学に滲透し、ケンブリッジ大学はラムス哲学の牙城となつていった。

その上、大学生のマローウが誘いこまれた政府諜報機関の長、サー・フランシス・ウォールシンガムは、ラムスと個人的な交際があり、彼の日誌には、ラムス氏が一五七一年十二月十九日と二十五日には彼を訪ねて来てくれた、との書き入れがある。<sup>(2)</sup>

## II

作品全体の趣旨は、権謀術数を弄するマキャベリストぞろいのカトリック側によってプロテスタントたちは為すすべもなく虐殺されていく、だが、それにもかかわらず「天網恢恢疎にして漏らさず」のたとえどおり、カトリックたちは策に溺れて自滅してゆき、フランス王国の王冠が最後にはプロテスタントのナヴァール王、後のアンリ四世の頭に帰する、というものである。

劇の最後の場面で、瀕死のアンリ三世（先のアンジュ公）が英国の使者に託するエリザベス女王へのメッセージは、

カトリック教国崩壊の予言と、その原因をなしたローマ教会への呪咀である。これは作者マーロウのイギリス人としての立場をはっきりと示すものであり、それまで混沌無秩序のうちに推移してきた事態に、作者としての解釈あるいは解決をつけようとするものである。

出来事に追われて、作者は顔を出すいとまもなく一連の事件を描きつづけてきた。最後につけた作者の解釈は、一見取ってつけたような印象を免れがたいけれど、事件の渦中において逐一それを追わなければならなかった作家の立場というものを考えると、このような書き方がまんざら分らないわけではない。事件が一区切りついて、やっと作者は本心を明かし、読者（観客）もほっと一息つくのである。

そういうふう<sup>(3)</sup>に解釈すれば、批評家たちの意見は押しなべて冷淡であるが、全体の流れのなかで少し浮いたように思われたラムス虐殺の場面も、意外な重要性をもっていることに気付くのである。ラムスは恐ろしい喧騒をよそに、書齋でひとり書見している姿で、登場する。以下に、このラムスの場面を訳出してみよう。

ラムス 何とも恐ろしい叫び声がセーヌ河の方から聞こえてくる。

これでは怕<sub>おそ</sub>くて、さすがのラムス様も本を読んでいることができない。

ギユイーズ一派が橋を渡って、また私を脅迫しにやってくるような気がする。

#### タレウス登場

タレウス 逃げなさい、ラムス。命が惜しかったら逃げなさい！

ラムス どうした、タレウス。どうして私が逃げねばならぬ？

タレウス ギューイズ一味が

すぐ戸口のところで来て、ぼくらを殺そうとしている。

聞こえるでしょう、彼らの来たのが！ ぼくは窓から跳び出しますよ。

ラムス いいから、タレウス、落ち着け。

# ゴンザーゴとレート登場

ゴンザーゴ 誰だ、そこに行くのは？

レート タレウスですよ、ラムスの仲間の。

ゴンザーゴ いったい、お前は何者だ？

タレウス 私は、ラムスと同じように、ひとりのクリスチャンです。

レート 逃がしてやりましょう。彼はカトリックです。〔タレウス退場〕

ゴンザーゴ さあ、ラムス、金をはずめ、でないと刺し殺すぞ。

ラムス ああ、私は一介の学者だ！ どうして金のあるはずがあらう？

持っているものは王からいただくお給金だけで、

貰うとすぐに無くなってしまふ。

ギユイーズ、アンジュー、デュメース、  
モンソレル、兵士たち登場

アンジュー　そこで誰を捕まえたのか？

レート　ラムスです、王立論理学教授の。

ギユイーズ　刺し殺せ。

ラムス　　　おやおや

どこでラムスがそんな大罪を犯しましたか？

ギユイーズ　まったく何もかも生かじりで、

そのくせ何ごとと、とことんまで突きつめたことがない。

アリストテレスの『オルガノン』を嘲笑して、

がらくたの山だといったのは、おまえではなかったか？

全くの二分論者で、要約にだけたけている人が、

おまえの目には学者ということになる。

正直な話、そんな奴はドイツへ行ってお説教でもしてればいい、

学者たちが当然と見なす公理に異を唱えて。

そんな男にかぎって威張りくさって

「証言による論拠は人為的でない」なんて七面倒くさい屁理屈を振りまわすのだ。

そうはいかぬことを証明するためにも、ラムスには死んでもらう。

これには何と答える気か？ おまえの「反論」も

役には立つまい——殺せ。

ラムス どうか、一言だけ話させてください！

アンジュー よし、言え。

ラムス 命が惜しくて、こんな余裕をお願いしているではありません。

いまわの際に疑いを晴らしておきたいからです。

つまり、私は、私の書いてきたことはよく理解しているという点です、

シェキウスという男は、それを誤解しているという話ですが。

私の論点は三つあるだけですが、それで彼の論点をすべて含んでいます。

私は、アリストテレスの『オルガノン』が混乱していることを知っています。

それを私は、すっきりした形に圧縮したのです。

そして、とりわけこのことは、アリストテレスのために言っておきたい、

アリストテレスを軽蔑する者は、

よい論理学者にも、よい哲学者にもなれない、と。

ソルボンヌの石頭たちが駄目な理由<sup>わけ</sup>は、

永遠の神への奉仕に捧げるべき努力を、

自分自身の仕事に払っているからです。



ギユイーズ　こんな下司野郎に、なぜわめかせておくのか？

殺せ、というのに。地獄の仲間のところへ送ってやれ。

アンジュー　炭焼きの小倅が、こんなに傲然としていたためしはない。〔ラムス刺されて死ぬ〕

### Ⅲ

この場面にまずタレウスが登場する。しかしこれは史実に反する。Audomarus Talaus (Omer Talon, 1510-62) は、そもそもラムスよりは五歳ほど年長にして、このラムス虐殺のとき、すでに死んでから一〇年の歳月が経っている。年長にもかかわらずタレウスはむしろラムスの弟子として、ラムス主義の弁護と普及のために力を尽した。そういう事実を知る観客にとって、二人が一緒に登場することはたいへん効果的だが、その効果はもっぱらマローウの創作である。

死を恐れる弟子は師に逃亡を勧める。だが、ラムスは自から殉教の死を選びとるかにのように落ち着いている。作者は周囲の喧騒と書斎の静謐とを対照的に際立たせている。それはソクラテスの死を連想させる。ここで注目すべき科白は、刺客ゴンザーゴに問いつめられたタレウスが、

I am, as Ramus is, a Christian. (第六場、一四行)<sup>(4)</sup>

と、答えることである。これはラムス殺害のために来た刺客を相手にしては、かなり危険で、それだけ大胆な発言で

ある。だが、カトリックとプロテスタントの対立と憎悪がこまでエスカレートした段階では、そういう党派のレッテルをこえ、党派心から解放された単純な究極的な立場こそ重要である。

実在のタレウスも終生カトリックの立場にとどまったが、ラムスは、その権威主義や相変らず改まらない悪弊のゆえに、カトリック教会を棄てた。しかし、同じような権威主義的傾向が次第に目につくようになったカルヴィン主義を受け入れることもできなかった。そういう立場のラムスや、また相互の信条の相違にもかかわらず、彼との親しい関係を保ちつづけたタレウスのような人物にとつて、この一行はきわめて重要である。宗教戦争を克服すべき根拠がここに求められたことは歴史的にも明らかな事実であるが、マローウは歴史に先駆け、理論的にもこの一行に重要な意味をこめたと思われる。この一行こそ、作品全体がそこにかかっている支点である。

次の場面でゴンザーゴは、ラムスに金をゆする。それに対するラムスの返答は、今も昔も変らぬ学者の貧しさを表わして面白いが、引用の最後の行において、やがてフランス国王アンリ三世となるアンジュー公が「炭焼きの小倅……」という侮蔑の言葉を吐くのを思い合わせるとき、作者のこめた別の感慨に想い至るのである。作品の主要な登場人物は、すべて国王、皇太后、公爵など富においても権勢においても最高の地位に立つ人々ばかりである。彼らさえ権謀術数の果てに自滅してゆく。そういう全体の文脈のなかで、富も権力もない一介の哲学者の従容とした殉教者のような死はいつそう光り輝いてみえる。だが実在のラムスはここで描かれるほど貧乏ではなく、むしろ裕福であったと伝記作者は記している。<sup>(5)</sup>その事実を知りながらマローウが作品のなかでこういう扱い方をしたのは、宮廷に巣くうマキャベリズムとの対比を際立たせるために外ならない。

次にギューイズとアンジューが登場する。その短い場面においてギューイズは四回も *Stab him* (二二行) *Ramus shall die* (三五行) *'Kill him* (三十七行) *'Stab him* (五四行) と繰り返す。実際にギューイズがラムスの面前でこのよ

うな陣頭指揮をとったわけではないが、ギューイズが一番の首謀者となってバーソロミューの大虐殺が実行されたのである。性格の弱いアンジューなどは確かに一歩退いたかたちであり、ここでも、つなぎの科白か、上品とはいえない侮蔑のことは吐いただけである。しかもラムスは、ギューイズが企てるこの陰謀の主要な標的であった。だから、こういう描き方はそれなりに象徴的な、劇的な意味をもっているといえるだろう。

#### IV

ギューイズの科白のなかで興味ぶかいのは、ここにカトリック側の、また世間一般のラムス主義批判が要約されていることである。しかも、ラムス主義の最も重要な二つの特徴が、ぴたりと言い当てられていることである。つまり「二分法」(二八行)と'Argumentum testimonii est inartificiale' (三四行)という主張である。カトリックの依拠するスコラ主義・アリストテレス主義に反対して、ラムスが主張した点は、まさにこの二つに要約される。それをギューイズは見抜いている。「憎悪や敵意すらも認識を促進することがある」というベルジャイエフのことばの好個の実例である。<sup>(6)</sup>

ギューイズは、ラムスまたはラムス主義者を'flat dichotomist' (二八行) といつて非難する。'flat'は比喩的な意味では'Unrelieved by conditions or qualifications; absolute, downright, unqualified, plain, peremptory.' (OED II. 6) を意味するが、文字どおりには「水平に延びた平板な」さまを意味する。それがまたラムス論理学の特徴を何よりも的確に示している点が言い得て妙といわなければならない。

スコラ哲学がいわゆる煩瑣哲学に陥って、人々に厭きられ嫌われ、新しい出口が模索されていたとき、怪刀乱麻を

断つごとく単純に明解に explain できる論理が、法廷や教会の実践家に歓迎されたのである。二分法で割りきつてゆくラムスの図表 (tabula) はそれこそ *tab* そのものである。やがて現われるもうひとりのフランスの哲学者の「明解判明 (clear and distinct) 知は真なり」という標語も、この *tab* の延長上にある。

ギューイズがまたラムス主義者を「要約にだけたけた人」(二九行) とけなしたのも面白い。*tab* な解決が機能的・能率的であることは当然である。ハーディン・クレイグによれば、「ラムスは世界に例を見ない捷径 (short-cut) の達人であつて、……アリストテレスの『オルガノン』を十分の一に短縮した」という。<sup>(7)</sup>

J・R・グレンは『オックスフォード英語辞典』の 'epitome' の項に 'in depreciatory sense: Something that is reduced to insignificant dimensions. Obs.' とあるのを捉え、ギューイズは、ラムスがアリストテレスを矮小化した、と非難しているのだ、と述べている。<sup>(8)</sup>

ギューイズの科白のなかで最も注目すべきものは先に引用したラテン語の一行である。これこそラムス論理学の根幹をなす命題である。ラムスによれば、その二分法にしたがい、あらゆる論拠 (argument) は二種類に分かれる。人が自分だけで見えるものと、他人の眼によつて見るものである。前者は 'artificial argument' といわれる。'artificial' とは 'According to the rules of art' (OED III. 10.) の意味で、人間の思惟作用の本質に内在し、明白で、したがって (現代の用法とは正反対になるが) 自然な、証拠としては他の何ものも必要としないものである。後者は 'inartificial argument' といわれる。'inartificial' には 'Of an argument: Not according to the art of Logic; not deduced by logical methods from accepted premises, but derived from authority or testimony. Obs.' (OED. 3) とつう、*tab* にびつたりと当てはまる定義が『オックスフォード英語辞典』に載っている。したがって、それは、たとえばシャルマーニュの戴冠、イエス・キリストの復活のような論拠を意味する。

「この区別をアリストテレス主義者は不合理なものと見なすけれども、ラムス主義者にとっては、これこそ、証明によって確認することのできないような論拠、ことに啓示神学に対して、論理学上の場所を提供するものであった。

そして啓示神学こそ、argument inartificialの最高の実例であった。ラムスは、こういうargumentsは事物の性質を究明することには役立たないけれども、多くのことが証言にもとづかなければならない国事または人事にあっては重要な価値をもつものである、と説明した。(中略) inartificial argumentsという理論に対するアリストテレス主義者たちの敵意は、これが批判の法廷をすっかり権威づけることになるのではないかという危惧から生じている」とベリー・ミラーは述べている。<sup>9)</sup> 繰り返して言うておく、あの一行が啓示神学の基礎を提供するのだ。

ラムスのこのような主張は、古くは普遍論争から近くはカントの認識論に至るまで、アリストテレス的な主知主義に対して「信仰の論理」を確立しようとする努力の一環と見なさなければならないものである。ギュイーズ公の反発は当然であり、それをここに描いたマローロウの理解は的確だといわなければならない。

ところで、ギュイーズの吐く次の一行、

To contradict which, I say, Ramus shall die : : (第六場、三五行)

は、'artificial'なる語の二義性を巧みに使ったものである。先に述べた学術用語としての特殊な意味のほかに、今日と同じく'artificial'は'natural'の反意語として「人為的」「人工的」から「巧みな」という意味をもっていたし、'artificial'はその否定として「不手際な、拙劣な、無策な」という意味で用いられていたのである。いま、皆んなの眼の前で起ころうとしている出来事 (Argumentum testimonii) は、ラムスというユグノー最大の理論的指導者の殺害で

あり、それは今回の陰謀の最大の目的の一つでもあったのだから、それが不手際だったの、拙劣だったの、人間のすることではない、などという誹りを受けてはならない。そのためには、ラムスに死んでもらわなければならない。

## V

‘nego argumentum’ (二六行) もスコラ哲学の議論において用いられた学術用語である。ギユイーズは初めから「反論」なぞ認めぬ勢いであるが、ラムスは許可をアンジューに求め、弁論家にふさわしく、命乞いではなく、誤解を解きたいのだ、という穏やかな前置きから始め、かつて激しい論争を戦った相手 Jacob Schlegel (本文では Schekius) への反論を行なう。

ラムスには、先に登場したタレウスのような共鳴者がある一方、Schlegel のような反対者があった。一五九三年に書かれたゲイブリエル・ハーヴェイの次のような証言がある。

「一時私は、大波が互いにぶつかり合う海に浮かび、熱心な飽くことを知らぬ貪欲さをもって多くの有名な論文を貪り読んだ時期があった。とりわけアリストテレスの、プラトンや古代の哲学者たち、希有な超人間的な才能に恵まれたさまざまな優れたプラトン主義者たちに対する批判、そのアリストテレスに反論する殉教者ユステイヌス、フィロポヌス、ヴァラ、ヴィヴェス、ラムスたちの批判、ああ、しかし、そのラムスに向かって、ペリオニウス、ガランディウス、カルペンタリウス、スケギウス、リエブレルス等、大勢の弁論者が学寮長や大学評議員の味方につかないはずはない。それなら、この王立雄弁・哲学教授にお気に入りの寵臣はいないのか？ タラエウス、オサトス、フレイギウス、ミノス、ロディングス、スクリボニウスたちは、ラムスの側に立って、彼らに反論する。こんなふう

に私は、あの論理学と哲学の熱い論争の過程のなかにいた。<sup>(10)</sup>」

このおびただしい学者の名前の列挙のなかに、われわれは当時の醗酵するような知的興奮を感じることができる。そしてここに、ラムスをはさんで、その敵と味方の名簿のなかにスケギウスとタラエウスの名前を見出すことができる。ラムス自身の著書のなかに『ヤーコブ・シェキウムに反論してアリストテレスを弁護す』(*Defensio pro Aristotele adversus Iac. Schectum*, Lausanne, 1571) という一冊がある。この表題からしても、ゲイブリエル・ハーヴェイの興奮する論戦は決して一筋縄で片付けられるものではなかった。ラムス自身も若い頃は激しくアリストテレスを攻撃したものの、その後はアリストテレスに必ずしも反対ではなく、不毛な注釈の堆積の下にアリストテレスを埋めた空虚なスコラ学者にのみ反対しているのだ、と唱えて生涯の大半を送っている。<sup>(11)</sup> それにしても、

...my places, being but three, contains all his. (第六場、四四行)

という一行は、これだけでは何のことか分からない。place とは、哲学用語で「トポス」のことである。トポスの説明としては、キケロの『トピカ』(II, 7-8) がいちばん分かりやすい。

「隠れているものを探し出すことは、その隠れている場所がはっきりと分かれば、易しいことである。それと同じように、もしわれわれが、ある議論をつきとめたいと思うならば、その場所すなわちトピックを知らなければならぬ。トピックというのは、いわば議論が生じてくる場所にアリストテレスがつけた名前であるから。したがって、われわれは、トピックとは議論の場所である、そして、議論とは疑わしい事柄を明確化する推理の過程である、と定義

することができ<sup>(12)</sup>る。」

ところで、伝統的な学問の形態に疑問をもつラムスは、『分析論後書』から、三つの分析方法の原理を引き出してくる。ラムスは、「要するに、〈すべてについて、de omni〉、〈そのもの自体に即して、per se〉、〈全体について（普遍的）de universal〉という、これら三つの特徴によって特徴づけられたすべての陳述が、学芸の真の原理であり、その真理性の第一原因である」と述べている。そしてこの三つの原理はやがて「真理の法則」、「正義の法則」、「英知の法則」として知られるにいたった。<sup>(13)</sup>

分析方法の相違は、それぞれの方法が最もよく妥当する分野の相違と対応するのは当然である。そして確かにこの三つ以外のトポスを考えることはできない。かつ「真理」「正義」「英知」という分類は、どこか後のカントの三批判にも通じるところがある。

だが、このようなラムスの三つの法則を、シェーグクが範疇についてのラムスの「小歌」とけなしたことがあ<sup>(14)</sup>った。そのため、二人の間に激しい応酬があったことは、先に引用したラムスの著書の表題にうかがうことができる。マールウの変哲もない一行に、これだけの事実が詰まっている。

このように、ラムスは論敵に対する弁明を行ない、彼の生涯の総括を行ない、心たかまるままに将来の学者に対する勧告を行なう。ラムスには、自分こそ正しいアリストテレスの継承者だという自覚がある、少なくともマールウは本心からそう思っていたらしい。その証拠に、『フォースタス博士の悲劇』第一幕第一場の冒頭の独白においてフォースタスが、アリストテレスの分析論からの引用として述べる「巧ミニ論ズルハ、コレ論理学ノ目的ナリ」という言葉は、実はラムスの『弁証論』の一節である。<sup>(15)</sup>

ラムスの真意を解することなく、ギューイーズの片棒をかついでラムスを攻撃する頑迷固陋なソルボンヌの似而非ア



リストテリアンたちに矛先が向かったとき、ギューイズは遂にしびれをきらして「殺せ」という。ラムスの卑しい素姓に対するアンジューの下品な科白で、この場面は終る。

## VI

「聖バーソロミューの虐殺」は宗教戦争の過程でおこった大事件であるから、これに言及する書物は多い。近頃評判の堀田善衛『ミシェル城館の人』（集英社、一九九二）の、とくに第二部は、この事件に詳しい。また、トーマス・マンの兄ハインリヒ・マンには「アンリ四世の青春」（小栗浩訳、晶文社、一九七三）という作品がある。この作品の完成は一九三五年であるが、一九三〇年にはナチスが台頭し、三三年には作者はアカデミーから除名され、フランスへ亡命し、国籍を剥奪されている。そのような彼の生涯が、十六世紀の動乱と重ね合わされている。

さらにフランシス・イェイツ『ヴァロワ・タピスリー』（一九五九、第二版はRoutledge and Kegan Paulから一九七五、その邦訳『ヴァロワ・タピスリーの謎』藤井・山田訳、平凡社、一九八九）には、この事件の、したがってこの作品に登場する主役たちの肖像画が掲げられている。まだ写真のない時代ではあるが、ヴァロワ朝一族の母と娘、また兄弟同士の、よく似た顔つきを見ると、きつと迫真の出来ばえであつたのであろう。この肖像を見ながら、マールウの作品を読むと、いっそう生々しい臨場感を感じることができる。

しかし、この作品は、マールウの他の作品と比べたとき、最後の作品であるにもかかわらず、芸術的完成度は著しく劣つたものといわなければならない。題材を歴史にも伝説にも採らず、彼が八歳（われわれ日本流に言えば小学校三年生）のときに隣国におこり、自国の女王にも関わりのある現代史を扱ったとき、その圧倒的な素材はマールウの才

能をもってしても扱いきれなかったのではないか。

その代わり、この血腥い事件の経過を知悉する観客は、あたかも八月十五日前後われわれが先の大戦の映像をテレビで見ても追想するのと同じような興奮を味わうことができたのではないか。

作品は、一五七二年の「聖バソロミュー虐殺事件」の直前から、一五八九年アンリ三世暗殺までの十七年間を扱い、一五九一年かその翌年に書かれたと推測される。アンリ四世となったナヴァール公がプロテスタンティズムを棄てるのは一五九三年、マールロウの死ぬ年であるから、作品の結末が、アンリ四世の親英、親エリザベス政策への期待となつて終っていることは当然である。因みにギュイーズ公の従姉メアリー・スチュアートが、女王エリザベスによつて死刑に処せられたのは一五八七年のことである。

それにしてもマールロウは、驚くべき早熟の天才であつた。マールロウがすでに『タンバレイン大王』（一五八七）、『フォースタス博士の悲劇』（二五八九）、『マルタ島のユダヤ人』（二五九〇）を書き上げていたとき、同年齡のシェイクスピアにまだ見るべき作品はなかつた。<sup>(16)</sup>一五九三年五月三十日、二九歳でマールロウが死んだとき、シェイクスピアよりマールロウの方が、才能豊かな将来を嘱望される劇作家ではなかつたか。

ケンブリッジ大学在学中から、その豊かな才能と幅広い交友関係のゆえに諜報機関と関係を持ち、大陸にまで渡つてカトリック教徒の動静をさぐる仕事を行なつたと想像されている。彼自身がカトリックではないかと疑われ、修士の学位獲得が危ぶまれたとき、枢密院が大学当局に、「国事に奔走した者」というお墨付きを送つて事なきを得ている。また、ロンドン郊外デットフォードの料亭で会食中、喧嘩になつて死んだといわれるが、本当は政界の裏の消息を知りすぎたために消されたというのが実情のようである。<sup>(17)</sup>いずれにせよ、彼は若くしていやになるほど政治の実態に触れていた男である。そういう人物が『パリの虐殺』を書いたとすれば、そこには生半かならぬ思い入れがあつたこと

であろう。マールロウの父が靴職人であったこととラムスの父が炭焼きであったことは二重写しになって、アンジュー公にあんな科白を吐かせているように思われる。

だが、この作品は上演には向かない作品で、われわれがこれを観る機会はずまいであろう。とりわけラムスの場面は、ロンドンの一般の観客には、ちんぷんかんぷんの哲学談議と思われるかねない。マールロウも観客としてはケンブリッジあたりの大学人を意識していたのかもしれない。それからあらぬか、コーパス・クリステイ学寮の後輩たちは、一九六六年これを上演して、彼らの先輩に敬意を表したのであった。<sup>(18)</sup>

〔傍白〕学寮の年中行事であるから、上演の事情は、ほとんどそのときと同じであろう。私がこの学寮に学んだのは一九六七年から六八年にかけてであるが、六八年の初夏のころ、十七世紀スペインの或る劇作家の、いまだ英訳のなかった作品を初めて英訳して上演したことがあった。レカンプトン・ハウスの広い芝生の上に椅子を並べ、篝火をたき、婦人たちは膝掛けを用意して観劇するのだ。劇が終った後に振舞われたパンチの味も、今は懐しい。

## 注

- (1) 拙稿「ミルトンとラムス論理学」〔聖心女子大学論叢 第八十二集、一九九四〕三九—四〇ページ。
- (2) John Bakeless, *The Tragical History of Christopher Marlowe* (Harvard, 1942), II, 82.  
 Cf. Frederick S. Boas, *Christopher Marlowe: A Biographical and Critical Study* (Oxford, 1940), p. 160.  
 John R. Glenn, "The Martyrdom of Ramus in Marlowe's *The Massacre at Paris*," *Papers on Language and Literature*, 9 (1973), p. 368.
- (3) 「殺人が行なわれている最中に全く不必要な哲学談議」 John Bakeless, *op. cit.*, p. 82.

「大虐殺の血祭の最中に奇妙にアカデミックな幕間狂言」 Philip Henderson, *Christopher Marlowe* (London: Longmans, Green and Co., 1952), p. 113.

「ラムスの死は不当に引き延ばされている」 Michel Poirier, *Christopher Marlowe* (London: Chatto and Windus, 1950), p. 167. それに対して、最近好意的な批評が目立つ。

David Galloway, 'The Ramus Scene in Marlowe's *The Massacre at Paris*,' *Notes and Queries*, 198 (1953), 146-147. 以下、この「血腥い事件の中程に二つの休止を提供して劇的な緊張を高め、明確な劇的心理的役割を果たす不可欠な場面」と見なされてゐる。

John R. Glenn, *op. cit.*, pp. 365-379. ラムスは、左右の極端な政治的宗教的思想に対抗して護るべき人間的価値を表現しており、劇全体の「焦点」として用いられている、という。

- (4) テキストは、読み易さを優先して H. S. Bennett (ed.), *The Jew of Malta and The Massacre at Paris* (London: Methuen and Co. Ltd., 1931) から引用した。

- (5) Walter J. Ong, *Ramus, Method, and the Decay of Dialogue* (Harvard, 1958), p. 328, n. 70.

- (6) 氷上英廣訳『セルジャーエフ著作集 第四巻 孤独と愛と社会』(白水社、一九六〇)「二七ページ」。

- (7) Cf. Hardin Craig, *The Enchanted Glass* (1935, reprint ed., Oxford: Basil Blackwell, 1966), pp. 143-44.

- (8) John R. Glenn, *op. cit.*, p. 374.

- (9) Perry Miller, *The New England Mind: The Seventeenth Century* (Harvard, 1939), p. 130.

- (10) Gabriel Harvey, *Pierce's Supererogation*, in G. Gregory Smith (ed.), *Elizabethan Critical Essays* (Oxford, 1904), II, 245-46.

- (11) John R. Glenn, *op. cit.*, p. 375.

- (12) Cicero, *Topica* in The Loeb Classical Library (London: Heinemann, 1968), pp. 386-87.

- (13) Wilbur Samuel Howell, *Logic and Rhetoric in England, 1500-1700* (Princeton, 1956), p. 150. Perry Miller, *op. cit.*, pp. 172-73.

- (14) Walter J. Ong, *op. cit.*, p. 258.

- (15) 平井正徳訳『フォースタス博士の悲劇』、小津次郎・小田島雄志編『エリザベス演劇集』(筑摩書房、一九七四)、一四二

一四三ページ。 Cf. Perry Miller, *op. cit.*, p. 118.

- (16) Harry Levin, *The Overreacher: A Study of Christopher Marlowe* (Harvard, 1952), Ⅷ. 富原芳彰『シェイクスピア入門』(研究社、一九五五、一九七七)、一四八ページ。

- (17) 一五九三年五月三十日の夜、マローウと会食したのは、イングラム・フライザー、ロバート・ポウリー、ニコラス・スキアズであった。彼らの部屋に料理が運ばれた直後に、騒ぎがおこり、フライザーは頭から血を出し、マローウはフライザーのナイフで致命傷を負い、死んで横たわっていた。続く尋問においてフライザーは、賭事をめぐる喧嘩からわが身を守るために偶発的にマローウを殺した、と証言し、他の二人もすべてフライザーの証言を支持した。三人ともいかがわしい人物で、ウォールシンガム兄弟に雇われた諜報部員であった。危険な重荷となったマローウの殺害が、冷酷に仕組まれたことは確実と思われる。 Cf. Michael Stapleton, *The Cambridge Guide to English Literature* (Cambridge U.P., 1985), p. 564.

北川悌二著『マローウ研究』(研究社、一九六四)三七—五五ページに詳しい説明がある。

- (18) Clifford Leech, *Christopher Marlowe: Poet for the Stage* (New York: AMS Press, 1986), pp. 1, 158, n. 25.